

30) Wells 笑気麻酔の虚実

—そのとき麻酔をかけたのは誰か—

Truth and falsehood about Well's nitrous
oxide anesthesia

—Who really administered it?—

日本歯科大学新潟 中原 泉
歯学部医の博物館

Sen Nakahara, The Museum of Dental
Medicine, The Nippon Dental University
School of Dentistry at Niigata

1844年12月11日、コネチカット州ハートフォードのメイン・ストリートの角にある 歯科診療所で、笑気ガス吸入による最初の全身麻酔が施行された。

後年、この歴史的な出来事に関し、関係者の間に重大な齟齬（食違い）が生じた。即ち、その時被験者となった H. Wells の歯を抜去した J.M. Riggs は、「Wells は Colton からバッグを受けると、それを両手で膝にかかえた。次に、バッグのチューブを自ら口にくわえ、ガスを吸入した」と言う。

一方、その時亜酸化窒素を調合したガス・バッグを持参した G.Q. Colton は、自分は「Wells の脇に立つと、手にしたバッグのチューブを彼の口にくわえさせ、ガスを吸入させた」と言う。

2人の証言は、全く対蹠している。その時麻酔をかけたのは、Wells なのか Colton なのか。事の重大性からみて、記憶違いがあるとは思えない。2人のどちらかがウソをついていることになる。

この虚実は、等閑に付すことはできない。なぜなら、その時麻酔をかけた人物が、史上最初の吸入麻酔医ということになるからである。

Wells は、これに関しては沈黙したまま夭折してしまった。

1847年、Riggs は Wells の笑気麻酔に関する宣誓陳述書を提出した。そのなかで彼は次のように述べた。「そして次の日、合意に従って、その窒素の新しい酸化物は、前述の彼の要請によって Horace. Wells に投与された。それから私は、彼

の上顎臼歯の1本を抜去した。」この文面からは、一体誰がガスを投与したのか分らない。また、Colton に関しては、一言半句も触れていない。

それから25年後の1872年、Riggs はニューヨークの友人からの質問に対し、手書きの返事を送った。文中、Colton の目的は金を得ることであり、他には何もないと非難したあと、「Wells は自分の膝にバッグを置いた。彼は口にチューブをくわえ、そして腕の筋肉が弛緩して無感覚になるまで吸い込んだ。彼の頭部は按頭台にもたれた。私はただちに鉗子を彼の口内へ、歯の上に差し入れ、そしてそれを抜去した。」とその時の情景を具体的に記した。

書簡の結論として Riggs は、Colton の為したことを、(1) 笑気ガスを用意した、(2) ガスのバッグを Wells に渡した、(3) 笑気ガス吸入による抜歯手術を目撃しただけだ、と繰り返えし断言した。

さらに、それから13年後の1885年（この年に Riggs は死去する）、Riggs は「New York Academy of Medicine」に次のように記載した。「それから彼は彼自身の手でバッグを取り、そしてガスを吸入した。彼は両腕の筋肉のコントロールを失って、口からガスのチューブを引きずったまま、彼の両肘が肘掛からずれ落ちた。彼の頭部は按頭台にもたれた。私は鉗子をそっと歯（上顎左臼歯）に当てがい、そしてそれを抜去した。」

文中 Riggs は、重ねて「誰も Wells にガスを投与しなかった。」と強調し、「彼は独りでこの行為の責任を負った。」と説明している。確かに巡回興行のお楽しみショーではなく、医療の場における投与であったから、万一のトラブルを懸念して、Colton に累を及ぼさぬように Wells 独りで断行した、という可能性はある。

Riggs に対し Colton は、沈黙を守り反論しなかった。利口に逆わず喧嘩をしなかった、と言ってよいだろう。Riggs の死の翌年1886年、Colton は「麻酔—誰がこの偉大な発見を成し発展させたか？」という報告書をだした。そのなかで彼は、次のように記した。

「翌朝—1844年12月11日—私は彼の診療所にガ

スのバッグを持参した—Dr. Riggs はすでに呼ばれていた—そして Wells にそれを投与した. そして Dr. Riggs は彼の臼歯を抜去した.」ここで Colton は、ガスを投与した administered という言葉を使っている.

それから7年経った1894年, Wells の麻酔発見50周年記念祭に招かれた Colton は、特別講演のなかで次のように語った.

「そこで翌日, 私はガスのバッグを携えて, 彼の診療所へ行った. そして彼は人を送って, 隣の歯科医師 Dr. Riggs を呼び入れた. 私は, Dr. Wells にガスを投与した. そして Dr. Riggs が歯を抜去した.」ここでも Colton は、ガスを“投与した administered”という言葉を用いている.

それから2年後の1896年, Colton は「麻酔の発見の実話」を発表した. そのなかで彼は、「私は Wells に、前夜よりいく分多めにガスを与えた. そして Dr. Riggs は、歯を抜去した.」と記した. ここでは、ガスを“与えた gave”と表現しているが, administered と同義と解してよいだろう.

当時、亜酸化窒素の吸入にはリスクが伴うことは、常識であった. 吸入経験のない Wells が、ガス投与に熟達した Colton に、この危険性のある行為を委任しなかったとは考えにくい.

実際問題、Wells 自身が行なったとすれば、彼はガスを吸入しながら、自分でガス量の増減を調節しなければならない. しかも、当時の吸入器具はチューブから吸入するので、鼻腔からガスが洩れないように鼻をつまんでいる必要があった. 初心者には、そんな器用な真似は容易ではない. 当然、被験者の全身状態とその変化を客観的に見ながら、ガス量を微妙に操作しなければならないことだ. それをできるのは、笑気ガスの特性と器具の取扱いに習熟していた Colton 以外にはいない、と考える.

31) 山村樗次郎小伝 (第1報)

The Short Story of Umejiro Yamamura
D.D.S. (Part 1)

東京歯科大学 長谷川正康

Masayasu Hasegawa, Tokyo Dental College

山村樗次郎について、歯科界では一部の人のしか知られていないが、高山紀斎、血脇守之助と大変似た経歴で歯科医師になった人物である. 北米で苦学した俊才で、帰国後は高山、血脇を蔭で援助し、奥村鶴吉の非凡な才能を見ぬき、その将来を嘱目した人でもある. また、高山歯科医学院において教鞭をとり、歯冠架工術、歯冠継続術を担当し、さらに、わが国で歯科法医学について学会発表、講演を行った. また、「歯科法医学」という名称を用いた嚆矢の人でもある.

彼の人生は、一見、波乱に富んだように見られるが、自己の志を貫いた明治の歯科医人の面影を残す忘れ難い人物である.

残された記録には、樗の字が梅になっているものが多い. 例えば、「医術開業歯科試験及第之證」(明治30年4月)、および「歯科医術開業免状」(明治31年7月)には、梅次郎で医籍406号に登録されている. 御遺族の話では「樗をウメと読んでくれる人が少ないので、父自身が梅の字を書くようになった」という. また、樗次郎を樗二郎、梅二郎と誤記した記録もある.

彼は、慶応元年2月(1865)、元鳥取藩士山村清瑛の二男として鳥取市行徳に生れた.

明治8年(1875)鳥取中学に入学、明治13年(1880)卒業後、直ちに鳥取新報の創刊に携わった. 明治14年、板垣退助の起こした自由党の幹事林包明に見出され上京、黨員として活躍したが、党の行動が過激粗暴で、耳にしていた米国の政憲と比較して大きな違いがあることを嘆き、自ら米国の状況を見聞すべく渡米を計画した.

しかし、資金が無く、それを調達すべく、旧鳥取藩主池田輝知公に渡米の主旨を述べ援助を願った. 輝知公は、その意を了とし、また、陪席した侍臣河崎眞胤、神戸信義、高田小二郎らから資金